

## H 高齢者福祉施設の実態・課題

### ■ 施設概要

高齢者福祉センター（ふれあい館）は、60 歳以上の方が、健康増進・教養の向上・レクリエーションのために利用できる施設です。広間や囲碁将棋室を保有しており、介護予防講座などの事業を行っています。

〔施設一覧〕

地域	複合	施設名	面積（㎡）	築年	複合施設等
本町田 薬師池	○	ふれあいぬぎ館		1982	木曾山崎コミュニティセンター
相原	○	ふれあいけやき館		1982	堺市民センター
町田中 心	○	ふれあいまっこく館		1988	健康福祉会館
鶴川		ふれあいいちよう 館	720	1977	
忠生	◎	ふれあい桜館	2,824	1993	小山田高齢者在宅サービス センター
南		ふれあいまみじ館	607	1974	

### ■ 実態と課題

- 〔配置〕 ・ 市内 6 地域に配置されている。
- 〔建物〕 ・ 築 30 年を超える施設が 4 施設あり、それぞれ改修を行っている。
- 〔機能〕 ・ 複合している施設が 4 施設、単独施設が 2 施設ある。基本的に全館で同じサービスを提供している。
- 〔利用〕 ・ 各ふれあい館の月間利用実人数は約 200 人から約 500 人となっている。高齢者人口の増加や高齢者のニーズが変化している。
- 〔運営〕 ・ 5 館は直営、1 館のみ指定管理者による運営である。
- 〔コスト〕 ・ 利用料は無料であり、6 施設の行政収支の差額は約 2 億円である。

## ■ 4つの視点から

---

### 行政関与の必要性

- ・ 老人福祉法に基づいて設置している。設置は義務ではない。

### 設置目的との整合性

- ・ 当初の設置目的のとおり福祉施設として運用されている。
- ・ 高齢者人口が増加し、高齢者のニーズが変化している。

### 利用状況の妥当性

- ・ 利用者は60歳以上人口の約2%である。

### 施設の代替性

- ・ 高齢者事業については、他の公共施設の空きスペースを利用することが可能。

#### 〔現状・課題〕

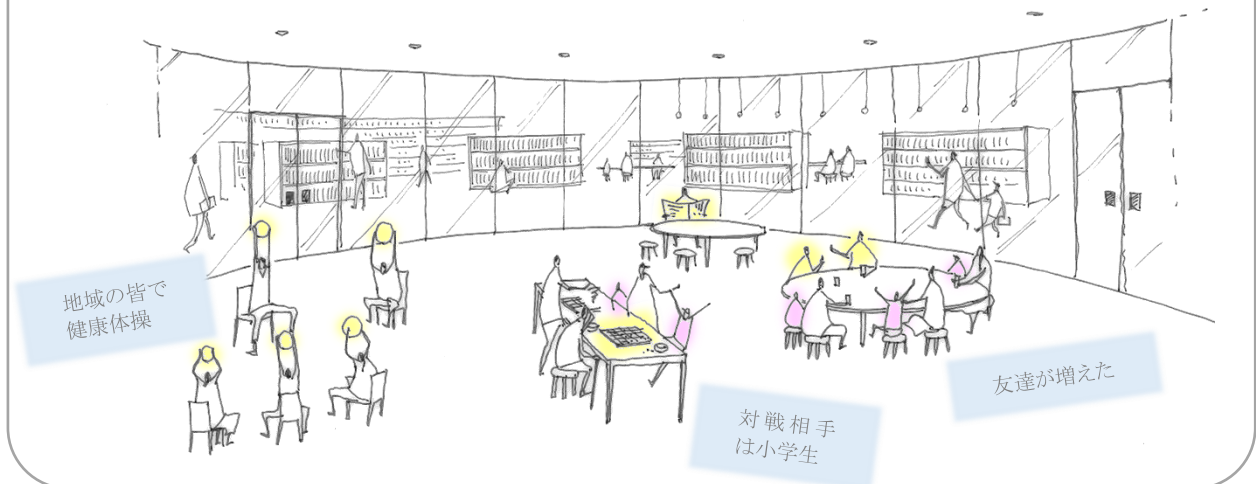
高齢者人口は増加していますが、ふれあい館の利用者は近年横ばいであり、利用者数は60歳以上人口の約2%にとどまっています。高齢者事業に求められることも変化していると考えられ、内容の見直しが課題です。現在、ふれあい館内で行っている事業については、特定の施設にとどまらず、集会施設など他の公共施設を活用しながら、より身近な場所で展開していくことが可能です。

## ▶ H 高齢者福祉施設の今後の方向性

### ■ 再編後のイメージ例

☆≡

- 専用（固定）の施設によるサービス提供から、建物とサービスを切り離し、ソフト化を図ることで、より多くの場所でサービスを展開し、より身近な場所でサービスを受けられる機会を増やします。
- 高齢者の居場所づくりについても「高齢者」に限定した居場所ではなく、高齢者を含めた多様な世代・目的の方が集える場へ転換することで、人と人との交流やつながりを促します。



### ■ 今後の方向性

活用

地域の活動拠点となる施設へ機能を移転することで、建物の総量圧縮を図るとともに、身近な場所でより多くの人がサービスを受けられる機会を増やす。

- ✓ 高齢者の居場所づくりの地域展開や健康づくり等各種講座について、市民センターや学校等の地域の活動拠点への移転を図り、建物は単独機能での建替えは行わない。

### 総合スーパーが行っている高齢者向け「朝活」(イオン葛西店)

総合スーパーイオンが、高齢者向けに、早朝から体操、卓球、囲碁、などといった娯楽を無料で楽しめる「朝活」の展開を始めています。集客力を上げることが狙いであり、「朝活」後、参加者は館内のカフェなどで朝食を取ったり、食料品を買って帰ったりするため、ビジネスとしての効果も上がっています。高齢者が気軽に通える開かれた場として機能しており、人と人の交流を促したり、体を動かすことで健康づくりにも寄与しています。



体操する参加者



店舗内の囲碁・将棋のスペース